

## 意識のハード・プロブレム ー人工意識開発者の考えを踏まえてー

三浦 凱人

人間の持つ意識とは何かという難問に対し、デイヴィッド・J・チャーマーズは意識のハード・プロブレムという概念を持ち出すことで議論を進展させた。意識のハード・プロブレムとは意識の問題を大きく二つに分けたとき的一方であり、主観的な性質を持つ現象的意識を自然化するという問題である。意識の問題を大きく分けた時のもう一方の問題を意識のイージー・プロブレムといい、これは客観的で物理的な性質を持つ心理学的意識を自然化する問題であり物理学の範囲にある問題である。チャーマーズは意識のハード・プロブレムは意識のイージー・プロブレムと違い物理学の範囲にはおさまらない問題であると主張し、唯物論とは違う立場からの解決をする立場を取っている。

チャーマーズが意識のハード・プロブレムが物理学の範囲におさまらないことを示す時に重要な役割を果たすのがゾンビ論法という手法である。ゾンビ論法というのはチャーマーズが物理的に人間と同一であり、機能的には差がないために人間と同じように情報を処理し、見分けのつかない振る舞いをするが現象的意識を欠き意識体験を持っていない哲学的ゾンビという概念を用いて展開する主張である。チャーマーズはこの哲学的ゾンビによって構成されるゾンビ世界が論理的に可能であるとした上で、実際に我々の生きている世界には意識体験があるという事実があり、この事実は意識体験が物理法則の外にあるものであると言えるため唯物論は偽であるという主張をした。チャーマーズはこのように唯物論を否定した上で世界の究極的な実在を情報とする中立的一元論を掲げた。

しかしチャーマーズのゾンビ論法に対し、チャーマーズが哲学的ゾンビの思考可能性を直観的に肯定する姿勢をとったことに水本正晴と鈴木貴之は否定的な立場をとり、水本は哲学的ゾンビは矛盾のある存在であり、人間と機能が同じであれば現象的意識を持たないことを証明できず、現象的意識がないのが明らかな場合、機能が人間と同じとは言えないのではないかとした。

これまでゾンビ論法は哲学的ゾンビという仮想物を対象に議論されてきたが本論文ではアラヤの開発中のメタ認知による内省機能とデータ学習により再現された想像力を持った人工意識という現実的なものを対象に思考実験を行なった。その結果、人工意識のニューラルネットワークが人間の脳を完全に再現することができ、この人工意識に人々が現象的意識を認めなければチャーマーズの主張する哲学的ゾンビの再現となり、チャーマーズのゾンビ論法は成立するがそうでない場合はゾンビ論法が成り立つかは議論の余地が残っているという結論に至った。

(指導教員 横山幹子)